

「子ども園 After School Project」

立教大学 松尾ゼミ A

石橋笑美奈 上村遥 後藤和輝

○中島輝 永野紗緒理 六笠紘史

1. 緒言

環境が変化している現代社会では、子ども達が体を動かす機会が減少しているとともに、自由に好きな遊びができる場所も制限されている。さらには、幼児期の子どもの環境は義務教育ではないため一人一人異なり、複数の環境に分かれてしまっている。こうした様々な環境が幼児の運動遊び・スポーツ活動にどのような影響をもたらしているのだろうか。

私たちは、子ども園、幼稚園、保育園の先生に幼児の活動環境や身体状況についてヒアリング調査を行い、現状を明らかにする。そして、子どもたちが心身ともに健康で豊かな生活を送ることができるよう、幼児の運動遊び・スポーツ機会推進策を提案する。

2. 研究方法・結果

(1) 先行研究

ア. 幼児期の運動の重要性

スポーツを行う上で、動きの習得に最も適している、即座に習得できるのは、9歳から12歳の「ゴールデンエイジ」と呼ばれる時期である。しかし、ゴールデンエイジを迎えるにあたり、特に重要となるのは、その前の3歳から8歳（プレゴールデンエイジ）と呼ばれる時期である。スキヤモンの発育発達曲線によると、脳神経系は出生直後から急激に発達し、4、5歳までには成人の80%程度に、10歳頃までにはほぼ90%に達している。

イ. 幼児の遊ぶ機会減少

「現代の社会は、科学技術の飛躍的な発展などにより、生活が便利になっている。(中略) 一般的な生活をするためだけであれば、必ずしも高い体力や多くの運動量を必要としなくなっており、そうした大人の意識は、子どもが体を動かす遊びをはじめとする身体活動の軽視につながっている。」(幼児期運動指針、文部科学省、2012)

ウ. 子どものからだの変化

「1986年から1997年にかけて幼児の運動能力は大きく低下しており、(中略) 体力・運動能力の低下の問題は、幼児期より継続的に捉えていくことが重要であると述べている。(中略) 2007年の幼稚園年長児は1985年の年少児並みと2歳程度運動レベルが下がっている。」(長谷部ほか、2014)

(2) 子どもの園の現状と課題

ア. 調査概要

- ①対象： 埼玉県志木市にある認定子ども園 1 校 (247 名在籍)
- ②時期： 2016 年 9 月 26 日
- ③方法： 半構造化インタビュー (事前に送った質問内容をもとに聞き取り調査)

イ. 調査項目の構造

子どもの基本的属性、運動・遊びに対する考え方、運営での問題点

ウ. 得られた結果

- ・ 園内に幼稚園、保育園を構えている。
- ・ 基本的に両園の園児同士も一緒に遊ぶことはない。
- ・ 職員同士も互いの状況をあまり把握していない。
- ・ 週 2 日、外部の体育指導員を招き、園児に運動を行わせている。

(3) 幼稚園の現状と課題

ア. 調査概要

- ① 対象： 神奈川県大和市にある幼稚園
- ② 時期： 2016 年 8 月 30 日
- ③ 方法： 半構造化インタビュー (事前に送った質問内容をもとに聞き取り調査)

イ. 調査項目の構造

子どもの基本的属性、運動・遊びに対する考え方、運営での問題点

ウ. 得られた結果

- ・ 文部科学省の幼稚園教育要領に基づき正課体育の授業を週 2 日取り入れている。
- ・ 保護者達を子どもの運動に一生懸命にさせられる仕組みが少ない。
- ・ 園の慣習や環境によっても運動や遊びに対する考えも異なる。
- ・ 苦手意識や自信のなさが感じられる子がいる。

(4) 保育園の現状と課題

ア. 調査概要

- ①対象： 東京都杉並区にある保育園
- ②時期： 2016 年 8 月 29 日
- ③方法： 半構造化インタビュー (事前に送った質問内容をもとに聞き取り調査)

イ. 調査項目の構造

子供の基本属性、運動・遊びに対する考え方、運営での問題点

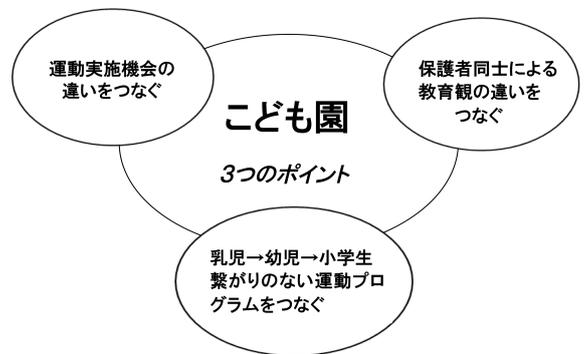
ウ. 得られた結果

- ・全体的に子どもたちの運動能力の低下が見られる。
- ・リズム遊び等を各クラスで実施して体を動かしている。
- ・苦手意識や自信のなさが感じられる子がいる。

3. まとめ・政策提言

(1) まとめ (調査結果による提言のポイント)

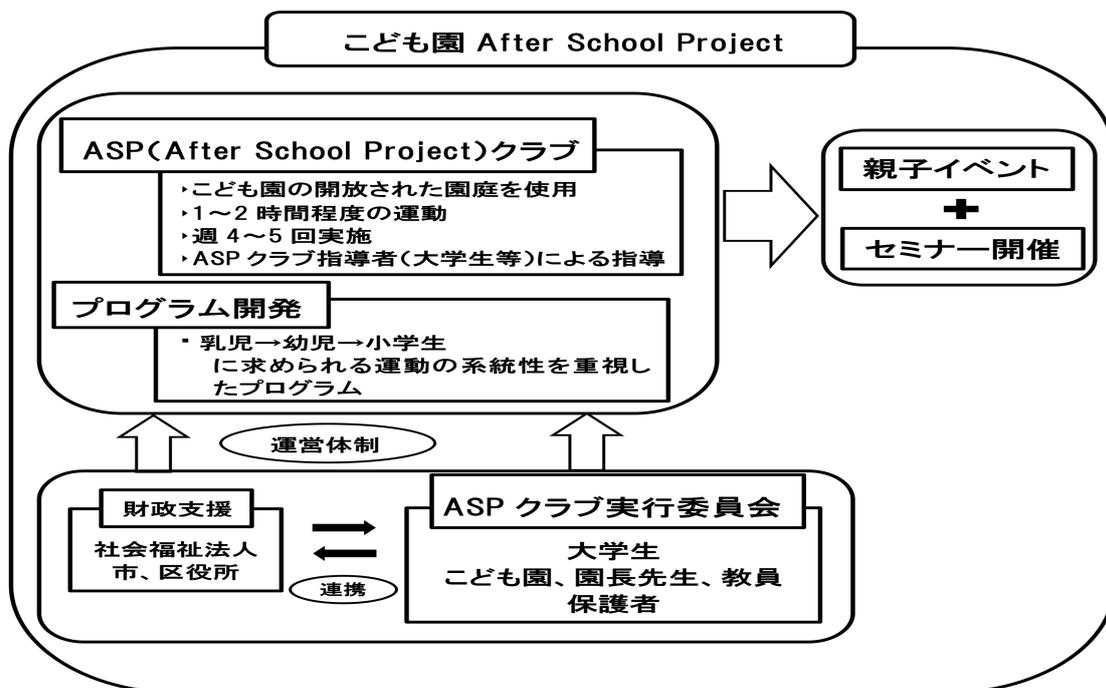
- ・子ども園内の幼稚園と保育園の教育内容・体制の違いによる運動実施機会の違いをつなぐ
- ・子ども園内の幼稚園と保育園の保護者同士の教育観の違いをつなぐ
- ・乳児期・幼児期・小学校期の運動をつなぐ



(2) 政策提言 (具体的な支援策)

ア. 支援策名: 「子ども園 After School Project」

→子ども園に着目し、各発達段階に適した運動遊びプログラムを継続的に実施する。



イ. クラブ概要

放課後の開放された子ども園の園庭に、在籍している園児が1～2時間程度の運動遊びを行える時間を設ける。週に4～5回程度行う。内容は、1種目のみ行うのではなく、複数種目の運動遊びをASPクラブ指導員、子ども園職員、園児の保護者が園児の安全を確保しつつ指導にあたる。

ウ. プログラム開発

小学校学習指導要領の運動遊びに基づき、各発達段階に適した運動遊びプログラムを開発する。遊びではなるべく園の道具を使わずに支援金や寄付金から購入し、使用する。

エ. 運営体制

ASPクラブのメンバーをもとに、8月中旬から下旬に公共施設または教育機関の施設などの借用可能である施設を利用し、親子合同型のイベントを開催する。さらに、子どもの発育発達に関するセミナーをイベントのプログラムの一つとして行い、保護者の関心を高める。

オ. 期待される効果

上記の支援策を実行することで以下の効果が期待できる。

- ①運動の習慣化を通して基礎体力の向上と生涯スポーツの基盤作りができる。
- ②幼稚園と保育園の異なる教育内容や体制をこえて、すべての子どもに運動遊びを提供できる。
- ③ASPのモデルが確立できれば、他の多くの子ども園、幼稚園、保育園にも応用が可能になる。

4. 参考文献

- ・子供の成長について http://www.bea.hi-ho.ne.jp/y-kondou/page_1.htm
(参照日 2016年9月8日)。
- ・小山郁(2005) 子どものスポーツ障害、山海堂。
- ・日本体育協会(2015) 幼児期からのアクティブチャイルドプログラム、日本体育協会。
- ・長谷部比呂美・池田裕恵・日比暁美・大西頼子(2014) 保育者評定による最近の幼児に見られる変化、淑徳大学短期大学部研究紀要第54号 pp.34-35。
- ・幼児期運動指針：文部科学省(2012)
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm
(参照日 2016年9月5日)